

# ケネー『経済表(原表)』は未完成か

岡田 純一

## I

ケネー『経済表』は、経済学史山脈の最奥にひとときわ高くそびえ立っている高峰である。その雪を頂いた崇高な雄姿をはるかに仰ぎみるものは、一度はその高峰の頂上に挑みたいとの意欲をかきたてられずにはおれないであろう。これまでに内外の多くの研究者たちが、この高峰に挑み、いくつかの貴重な足跡を残してきた。

しかし、今日にいたるまで、その神秘の頂は、解きえぬ謎を秘めるかのごとく、われわれの前に屹立しているのである。

社会的富の再生産＝循環の過程を、一枚のタブローに表示し、経済過程の自立的運動を完結的に説明し、科学としての経済学の生誕を告知したといわれるこの『経済表』は、また、偉大な経済学者たちのゆたかな想源となってきた。カール・マルクスのかの「再生産表式」や、レオン・ワルラスの「一般均衡理論」、さらには現代の W. レオンティエフの「産業連関表」などが、『経済表』からその想源をえていることは周知のことである。<sup>(1)</sup>

ところで、『経済表』と一口にいっても、ケネー自身の書いた『経済表』には、基礎数字や流通経路のうえで、いくつもの種類があって、外面的な形状も随分異なっている。1758年の末頃に最初に出版されたといわれるものが、「原表」Grand Tableau 初版であって、「原表」も三つの版がだされたといわれ

ている。第2版は1759年春ごろ、第3版は同年それからややおくれた頃に出版されたと推測されている。<sup>(2)</sup>

「原表」については、デュ・ポン・ド・ヌムールが1769年に書いたその「覚書き」(Notices abrégées)<sup>(3)</sup>のなかで、「この書はヴェルサイユ宮殿のなかでつくられた四つ折形の豪華版で、この写しは今ではもはやそれぞれ配布された個人の手許にしか発見されない。著者は周知のごとくケネー氏であるが、彼はこの版が1758年12月に公けにされたこと、そしてこの日付がその出版の正確な時期であることをわれわれに何度ものべた」<sup>(4)</sup>と書いたが、「原表」そのものは、1889年に、ステファン・パウエル教授によって、パリの Archives Nationales (「国立文書保管所」)で、その初版の草稿とみられるものおよび第2版の校正刷とその付属文献とみられるものが発見されるにいたるまでは、A. オンケンの言葉を借りれば、「ひともしるように、すでにないものとみられてい」<sup>(5)</sup>たのである。1894年に「イギリス経済学協会」The British Economic Associationによって、ケネー生誕200年を記念して、いわゆる「原表」第2版の校正刷が、「経済表の説明」Explication du Tableau Économique および「シュリー氏の王国経済の抜萃」Extraits des Économies Royales de M. de Sully を付して、写真版として出版されたのである。<sup>(6)</sup>これは1965年までは、『経済表原表』の定本とされていた。

「原表」第3版の存在は、G. シェル教授によって1905年に伝えられていたが、<sup>(7)</sup> 1965年にマルガリーテ・クチンスキー夫人は、デュ・ポン・ド・ヌムールの蔵書類を所蔵する、アメリカのデラウェアの「エリュセリアン・ヒルズ・ヒストリカル・ライブラリ」Eleutherian Hills Historical Library にそれを発見した。同図書館から送ってもらったマイクロ・フィルムを検討した結果、それをみいだしたのである。同夫人はその完本を独訳を付して1965年に発刊した。<sup>(8)</sup> ついで、ロナルド・L・ミックは、クチンスキー夫人とともに、1972年に、英語対訳本の「原表」第3版を出版した。この本には、クチンスキー夫人の発

見になる前記図書館の所蔵の第3版の複写（「経済表」とその付属文書の）と「初版」草稿および「第2版」校正刷（パリの「国立文書保管所」のものと、「国立図書館」Bibliothèque Nationale のものとの2つのコピー）を英訳対訳つきで付加している。

同書のなかで、R. L. ミークは、『『経済表』の1758～9年『諸版』』と題する序文をのせている。その論文でミークは『経済表原表』の経緯を詳しくのべているが、第3版については、次のようにまとめている。

「『第3版』——1759年のおそい時期におそらくつくられた——は、600リーヴルの循環を基礎にした「表」〔それは、「イギリス経済学協会」のコレクションにある「表」と全く同じである、——つまり、従来は第2版といわれた「表」である—岡田〕と、「経済表の説明」（「イギリス経済学協会のコレクションにおける「ケネーの訂正入りの経済表の説明」の訂正された版）がつき、そしてきわめて丁寧な註が付された24の箴言の1セット——それには「シュリイ氏の王国経済の抜萃」と題されている——がついている。〔イギリス経済学協会のコレクションのものは23の箴言—岡田〕これは「きわめて豪華な四つ折形」につくられていた。第3版は、第2版よりも部数が多くつくられ、〔第2版は3部しか刷られなかったとケネーはミラボーに書いている—岡田〕、それらのものは、若干のえらばれた個人たちにケネーによって送られた、と同時代の証言が示唆している。しかし、それらのものは一般に販売されたようには思われず、その「版」の1コピーしかそれ以来発見されていないのである。〕<sup>91</sup>と。

このような次第で、今日では、ケネーの『経済表』を研究するための資料はほぼ整えられたといつてよいであろう。<sup>92</sup> 本稿は、『経済表原表』は未完成であって、「範式」においてはじめて『経済表』の完成形態がえられたとする従来一般にとられてきた見解を現段階においてあらためて検討することを、課題とするものである。

注(1) マルクスとケネーとの関係については、さしあたり、J. Bénard, Marx et Quesnay,

in *F. Quesnay et la physiocratie*, Paris, I. N. E. D., 1958 を参照。マルクスがケネーの『経済表』と関連して、総再生産過程について、1863年7月6日にエンゲルスあての書簡で、独自の「経済表」を描いていることは有名である。マルクスの『剰余価値学説史』にも、「ケネーによる経済表」の長い論及がある。

レオン・ワルラスはひとも知るように、その主著『純粋経済学要論』の第37章をケネーをはじめとするフィジオクラトの学説の批判的研究にあてている。その章の最初のところでワルラスはいつている、即ち「一国民の経済生活の表を私は具体的例を用いて第35章で概説したが、それは経済表といわれるべきものである。経済学の歴史には、私のそれと類比される少くとも一つの有名な経済表 (*Tableau Economique*) がある。1758年にヴェルサイユで印刷され、そこにフィジオクラトの学説が集約されているケネー博士の経済表がそれである」と (*Léon Walras, Elements d'économie politique pure*, [1874初版] Paris, 1952, p. 384, 手塚寿郎訳『純粋経済学要論』[岩波文庫版] 200ページ)。さらに、その章の最後のところでは、「彼ら(フィジオクラト)の理論にいくつかの不完全な点があることを批判する余地はあるにしても、しかしそれは、フランスにおいて、彼らが根源的な純粋経済学を樹立した最初であったばかりでなく唯一の学派であったことを、決して妨げるものではない」(*ibid.*, p. 390, 手塚訳書(p)206ページ) とのべているのである。

レオンティフ自身ケネーから想源をえたことをものべているが(W. W. Leontief, *The Structure of American Economy*, 1913-39, p. 9.), 彼の「産業連関表」と、ケネーの『経済表』との関連については、現在では、いわば古典的ともいえる論文につきのものがある。A. Phillips, *The Tableau Economique as a simple Leontief model*, in *Quarterly Journal of Economics*, 1955, pp. 137-144.

- (2) ケネーは『経済表』についてのミラボーあての手紙(1758年12月か、1759年年初のもの)[*Archives Nationales*, M. 784, 3 liasses. にある]のなかで、第2版を3部印刷したとミラボーに書いている。この書簡の所在については、Georges Weulersse, *Les Manuscrits économiques de F. Quesnay et du Marquis de Mirabeau aux Archives Nationales* (M. 778 à M. 785), Paris, 1910, p. 12. G. Schelle; *Le docteur Quesnay*, Paris, 1907; ならびに、坂田太郎訳『ケネー経済表』19ページ参照。
- (3) デュ・ボン・ド・ヌムールは、この「覚書き」を、*Ephémérides du citoyen* 誌の1769年発行のものに掲載した。この「覚書き」の第1部 *première partie* は、Auguste Oncken 編の *François Quesnay, Œuvres économique et philosophiques*, 1888に収録され、Oncken の詳しい註が付されている [同書 pp. 145-158]。
- (4) Oncken, *op. cit.*, p. 155. 島津亮二・菱山泉訳『ケネー全集』第一巻, 268ページ。
- (5) Oncken は、1888年版の *Œuvres*, p. 155 ではそう書いたが、その後 S. Bauer

- 教授の「原表」草稿の発見で、この註は削除した。なお Onckenは、*Geschichte der National-ökonomie*, Leipzig, 1922 には、その324ページに Archives Nationales にある「原表」初版の草稿のファクシミリ再生版を挿入している。
- (6) *Tableau Économique by François Quesnay*, first printed in 1758 and now reproduced in facsimile for the British Economic Association, London and New York, 1894.
- (7) Gustav Schelle, Quesnay et le tableau économique, in *Revue d'économie politique*, 19<sup>e</sup> année, 1905, pp.502-503.
- (8) *Tableau économique par François Quesnay* [3. Ausgabe, 1759], herausgegeben, eingeleitet und übersetzt von Marguerite Kuczynski, 1965.
- (9) *Quesnay's Tableau Économique*, edited, with new material, translations and notes by Marguerite Kuczynski and Ronald L. Meek, London, 1972, p. xix. なお本論文における『経済表原表』は原則的にこの書より引用することをお断りしておく、この書は以下、*K. and M., Tableau* と略記する。
- (10) 最近、日本大学経済学部図書館は、クチンスキイ女史発見のものと同じ（厳密にいうと一カ所だけ異なる）『経済表原表』（第3版）を入手した。これは、「四つ折形の豪華版」というにふさわしい金色の中国風唐草模様の和紙のような表紙でとじられている。まさしく世界的発見であるが、現在まで入手経路は不明である。日大経済学部図書館の好意によって、この現物を見せて頂いたが、これをまのあたりにすると、先に引用したデュ・ポンの文章が、『経済表原表』第3版を指していることが実感としてわかる。デュ・ポンは第3版を初版と考えたのである。

## II

『経済表』は、当時のフランス経済の現状から推計された数字を基礎にしてつくられた表ではない。『経済表』の前提には、ケネーの経済的ビジョンによって作成された一つの国民経済モデルがあって、その国民経済モデルと、当時のフランス王国経済とのあいだにはこえがたい距離がある。現実のフランスの経済をケネーのいわゆる「理想王国」のモデルに一步でも近づけること、そこにケネーの政策論的指向があったとみることができるだろう。<sup>11)</sup>

そこで、「表」を理解するためのケネー経済学の独特な概念装置と分析用具についてすでに周知であるが、一応必要なかぎり考察しておこう。「原表」の

「初版」と「第2版」には、表の左右にびっしりと説明が書きこまれてあったが、「第3版」にいたって「経済表の説明」が表とは別に付加され、「初版」に付加されていた「国民年収入の分配の変化についての注意」*Remarques sur les variations de la distribution du revenus annuels d'une nation* は、「第3版」では、「シュリイ氏の王国経済の抜萃」*Extraits des Économies Royales de M. de Sully* と置き換えられたのであった。それらの文献には、すでに『経済表』以前にケネーが書いた諸論文、「穀物論」<sup>フエルニエ</sup>、「借地農論」<sup>フエルニエ</sup>、「人間論」および「租税論」などで形成されたケネー経済学の基礎的概念が使用されており、そして、さらにそれらの文献は、1860年代の後半に、「経済表の分析」（「経済表の算術的範式の分析」*Analyse de la formule arithmétique du Tableau économique*、は最初1766年に、*Journal de l'Agriculture, du Commerce et des Finances*, Juin, 1766 に掲載され、1767年のデュ・ポン・ド・ヌムール編の『フィジオクラシイ』に再録された）や、「農業国の経済的統治の箴言」*Maximes générales du gouvernement économique d'une royaume agricole et notes sur ces maximes*, 1767（これも『フィジオクラシイ』に掲載されている）などの論文に、拡充発展されているのである。われわれは、ケネーの『経済表』の前提を考察するにあたって、これらのケネーの諸論文を利用することにしたい。

まず経済表モデルの世界では、国民の全人口にたいして、生活資料と原料とを生産する農業の生産力が豊かで、農業投資にたいする収益率のよい、（これはケネーの表現では純生産率—後述—という）大農式の農業経営が全般に行きわたった農業国の状態である。「経済表の説明」のなかでは次のようにいわれる。

「ここでは牛をもって行われる小農法 (*la petite culture*) について語っているのではない。この場合（小農法）にあつては……大農法 (*la grande culture*) のあたえる生産額の5分の2を生産するに過ぎない。耕作者が原前払をするだけの富がないから、やむなくそうせざるをえない小農法は、土地が

費用を償うためにのみ大かたは使用されてしまっていて、土地所有そのものの犠牲のうえに行われており、この種の耕作に従事する大部分の人々の生活資料のための過度の支出が生産物の全部を吸収するような結果になってしまっている。この方法が支配的であるような、諸国民の貧困と破滅とをさらけ出すこの収益の少い耕作は、犁の半分の使用を基礎とし、年前払が原年前払の基本のおかげで、100%を生産しうるような、経済表の秩序とはなんらの関係もないのである。」(K. and M., *Tableau*, p. vi, 坂田太郎訳『ケネー経済表』—以下坂田訳『経済表』と略記—30～31ページ)

次にケネーは、『経済表』の世界では、社会が三つの階級によって基本的に構成されているとする。生産的支出をなす階級、——これは、のちの「経済表の分析」では生産的階級 *la classe productive*, 不生産的支出をなす階級——不生産的階級 *la classe stérile*, そして収入の支出をなす階級——地主階級 *la classe de propriétaires*, がこれである。

生産的階級は、土地を耕作し、国民の生活資料を生産し、工業のための原料を生産するだけでなく、収入（純生産—後述）を生みだす階級である。生産的階級の行う支出 *dépense* は、穀物飲料、木材、家畜などの生活資料を他の階級に支出し、手工業の加工品の原料を不生産的階級に支出し、このようにして、この階級は「富を永続するために、農業、秣場、牧畜、林業、鉱山、漁業」（「経済表の説明」）などに従事している。<sup>104</sup>

地主階級は、主権者、十分の一税徴収者（教会聖職者）を含む土地の所有者である。かれらは土地を管理する責任を負うが、生産的階級から収入 *revenu* すなわち純生産 *produit net* の支払を受け、それを支出して生活する階級である。

不生産的階級は、農業以外の商業や手工業などの仕事に従事する階級で、純生産を生産しないが、生産的階級から供給される原料に加工したり、商業その他の勤労を行うのである。

生産的階級が生産的 productive といわれ、不生産的階級が不妊的 sterile といわれるのは、「純生産」produit net を生産するかしないかの差異である。「純生産」という概念は、ケネー経済学の基本的な概念の一つであって、「穀物論」にすでにあらわれたものであるが、農業生産によって生産された総生産物の価値から農業生産に必要なあらゆる費用を差引いて、そこに余剰としてでてくる価値である。農業生産過程からのみ純生産は引出しするのであって、工業の生産物は、必要な経費だけの価値しか含まないというのがケネーの見解である。「人間論」のなかでも、「厳密にいて富を生産するのは、土地の労働に使用される人間のみである」<sup>103</sup> といったケネーは、「経済表の分析」においては、「土地の耕作によって、国民の年々の富を再生させ、農業労働の支出の前払いを行い、かつ年々土地の所有者の収入を支払う階級」<sup>104</sup>こそ生産階級である、と説く。しかも『経済表』の前提となっている経済社会モデルのなかにおいては、生産的階級の典型となっているのは、富裕な借地農<sup>フエルミエ</sup>であって、かれらこそ、「真の農業者<sup>ラブルール</sup>である」とケネーが、「穀物論」のなかでも説いたのである。大農経営を担って、高い農業生産力をあげることでできるのは、生産のための資本をもち生産を適切に管理、指揮しうる企業家 entrepreneur としての富裕な借地農、つまり農業資本家なのである。ところで、ケネーは、生産過程に投入される生産資本を「前払」avances というタームで表現する。『経済表』のなかには、表立って、は、「原前払」avances primitives と、「年前払」avances annuelles との二つの「前払」がでてくる。

「経済表の説明」のなかでは、「大農法において犁1台を備え、最初の収穫をあげる前2カ年間の労働中における家畜、道具、種子、飼料、維持費、賃金等への支出の最初の基本として充分完備した原前払」(K. and M., *Tableau*, p. vi, 坂田訳『経済表』31ページ)という表現がみられ、<sup>105</sup>「原前払」を創業資本のごとくとらえているが、設備資本ないしは固定資本がこれにあたるのみでよい。これにたいして、「年前払」は、賃金、家畜の飼料、種子などのごとく一



生産期間のなかで生産的に消費されてしまう「運転資本」ないし「流動資本」である。一年間の農業生産のためには「年前払」と「原前払」の一定部分が「年基本」として投入されるとみられる。『経済表』は、純生産率、すなわち、年前払にたいする純生産の高を100%とし、(大農式経営によってのみそのような効率が期待できる)、さらに「原前払」は「年前払」の約5倍にあたり、「原前払」の年々の減価償却を「原前払の利子」という独特なタームで表わし、これを「原前払」の10分の1と規定している。「経済表の説明」では、「前払の利子は、少くとも10%を示すのでなければならない。なぜならば、農業生産物は、10年間に少くとも1カ年分の収穫の価値を奪い去る破滅的な災害にさらされているからである」(K. and M., *Tableau*, p. vij, 坂田訳『経済表』31ページ)と、「原前払の利子」は災害保険料を含めてとらえられている。「年前払」は毎年更新されなければならない。「前払」のなかには、『経済表』に表面的には表われない「前払」として「土地前払」*avances foncières*がある。これは、土地を管理し、所有する地主が土地の保存と改良や、耕作地の拡張のために、長期的な視野で土地に投下する投資である。「経済表の分析」には、「地主の支出の最大部分は、少くとも不生産的支出である。われわれはそのうちから、かれらの土地の保存と改良とのために、土地の耕作を拡張するために、かれらの行う部分のみを除外することができる。しかしながら、かれらは、自然権によって、財産管理の配慮とかれらの世襲地の修復のための支出とを義務づけられているのであるから、純粋に不生産的な階級を形成する人口部分と混同することはできない」<sup>10</sup>とのべられている。

「前払」は厳密には純生産を生産するために、投下される資本であるはずであるが、ケネーは、不生産的階級の場合にも、「前払」を準用している。「経済表の説明」のなかにも「製造業の創設のための道具、機械、水車、鍛冶工場またはその他の慣行のためのこの階級の原前払」(K. and M., *Tableau*, pp. viii ~ix, 坂田訳『経済表』34ページ)と、不生産階級の「原前払」についての

べ、『経済表』には、「年前払」がでてくるのである。

最後に、『経済表』のモデルの世界では、取引の自由競争と、農業経営の富の所有権が完全に保障され、生産物の価格は、恒常的価格、つまり「良価」水準において安定していることが前提とされていることも重要である。<sup>11)</sup>

注(11) ケネーの方法論などに関しては、最近の Elizebeth Fox-Genovese, *The Origins of Physiocracy*, 1976. 参照。

- (12) 後述のように、生産的階級は、典型的には「富裕な借地農」les riches fermiers であるが、農業労働者もそこには含まれている。ケネーのいわゆる「細民」menu peuple, あるいは無産な貧民などを、ケネーの階級構成のなかで、第4の階級としてとり上げる見解（例えば、Henri Woog, *The Tableau Economique of François Quesnay*, Bern, 1950, p.20, note (1)), があるが、『経済表』の階級構成はあくまで、3階級であることに注意すべきである。久保田明光著『ケネー研究』第7章参照。
- (13) *François Quesnay et la Physiocratie*, I, N. E. D., II, p. 533, 坂田訳『経済表以前の諸論稿』203ページ。produit net は「純生産物」とも一般に訳されているが、『経済表』の世界では、それはあくまでも価値としてとらえられていることに注目すべきであり、私は故久保田教授に従って、「純生産」という訳語を用いる。ケネーは、富をたんに使用対象としてのみとらえず、貨幣を媒介として価格で表現される、価値として、一応使用価値的側面とは独立して、とらえ、富の生産が、投入される価値よりも、増殖された価値の生産であること、しかも増殖された価値、すなわち、「純生産」が、農業生産過程からひきだされるものであること、を明確にしたのである。この点で、ケネーは、資本主義的商品経済の分析としての経済学に、着実な一歩をふみ入れたといえるだろう。
- (14) *ibid.*, pp. 793-794, 坂田訳『経済表』132ページ。
- (15) 「経済表の分析」のなかでも、「創設の基本」fonds de l'établissement という表現が使われ (*ibid.*, p. 798, 坂田訳『経済表』138ページ), 創業資本としての「原前払」には、賃金、種子、飼料などの流動資本を含めているが、これらはあくまでも最初の収穫に先立つ、創設期のいわば設備経営のためのものであると解すれば、毎年の農業生産のための流動資本とは区別されるとみうる。のちに、ケネー経済学に忠実たろうとして N. Baudeau によって、「原前払」と「年前払」は、明確に固定資本と流動資本の区別に近いところまで整理された。渡辺輝雄教授の一連のボードー研究参照。
- (16) *ibid.*, p. 803, 坂田訳『経済表』147ページ。
- (17) 「経済表の分析」では、「農業の最高の発展段階に到達したその国土が、毎年50億

リーヴルの価値の再生産物をもたらし、しかもこの価値の永続する状態が、恒常的価格 *les prix constants* を基礎としているがごとき大王国を仮定しよう。ここに恒常的価格とは、商業の自由競争 *une libre concurrence de commerce* と農業経営の富の所有権の完全な保障とが、不断に存在する場合、商業国の間に通用するところの価格である。」(*ibid.*, pp. 794-795, 坂田訳『経済表』133ページ) といっている。「恒常的価格」とは、つまり「良価」水準において安定した価格である。「良価」*bon prix* もケネー経済学の基本的概念であり、「人間論」、「穀物論」などにおいて、ケネーは、「良価」が、生産過程における農業経営と相まって、流通過程において、農業生産力の高い水準を支えるものであることを説いているのである。しかも「良価」は、国際、国内の両面において、自由競争と、財産権の保障とを基礎とした、自由な取引活動の展開をまっけて、はじめて実現しうることを説き、ここに、重商主義批判の有力な理論的根拠の一つをおいているのである。「国家の富裕は貨幣の量に存せず、取引される富の豊富と、良価とに存する」(*ibid.*, p. 528, 坂田訳『経済表以前の諸論稿』256ページ) とケネーは「人間論」のなかでのべているのである。

### III

以上の前提条件を頭においた上で、われわれは、『経済表』の「原表」を考察しよう。「原表第3版」を考察の対象とすることをあらかじめお断りしておく。「原表」初版では収入の支出400リーヴルとなっていたが、これは大農経営の耕作で生産される総生産額のうち、地主が収入として取得する分、つまり純生産として見積られた4億リーヴルを、この階級の家族数を100万とみて、それで割ったものである。第3版では、農業生産力が高い場合、総生産額はもっと大きくなければならないと考えて、数字を純生産額で6億リーヴルと大きくし、収入の支出、つまり地主階級の支出を600リーヴルに引上げてある。これによって理解されるように、「原表」は全体の規模を基礎数字のうで100万分の1に縮小した形になっているが、国民経済全体の富の再生産構造を明らかにしようとしているわけで、その点で基礎数字を20億リーヴルと単位を人口3千万の大王国の国民経済的規模そのままに拡大している「範式」の場合と、表のねらいに差違はないのである。この点をまず確認しておきたい。「原表」の一

経 済 表 原 表 (第 3 版)

考察すべき事項 (1)3種類の支出, (2)支出の源泉, (3)支出の前払, (4)支出の分配, (5)支出の結果, (6)支出の再生産, (7)支出相互の関係, (8)支出と人口との関係, (9)農業との関係, (10)工業との関係, (11)商業との関係, (12)国民の富の総額との関係。

生産的支出  
農業等に関するもの

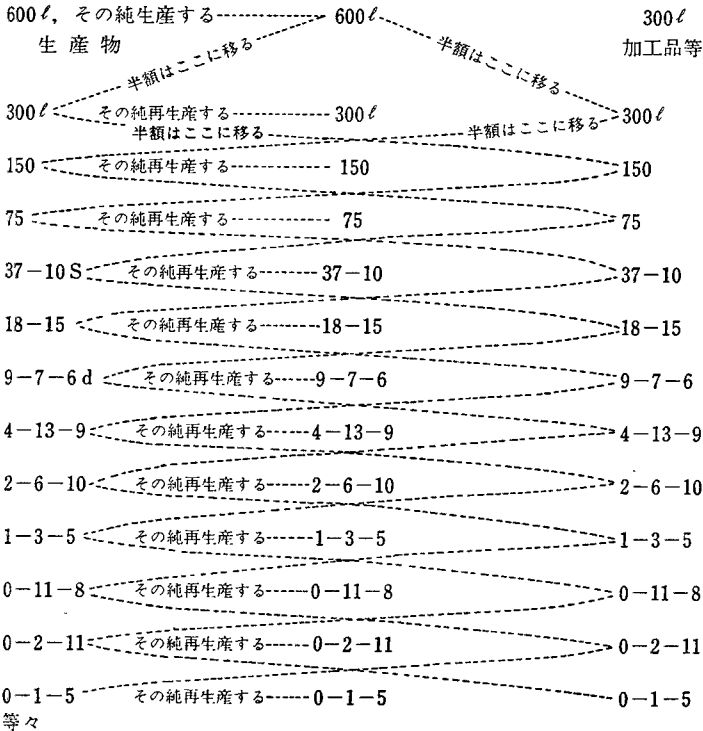
収入の支出  
租税は徴収ずみ, 生産的  
支出と不生産的支出とに  
分割される

不生産的支出  
工業等に関するもの

年 前 払  
600ℓの収入を生むた  
めの年前払は600ℓ

収 入  
年 額

年 前 払  
不生産的支出の加工  
品のための年前払は



再生産額合計…… 600ℓの収入, その他に土地の回復する600ℓの年経費と300ℓの農業者の原前払の利子とがある。したがって再生産総額は計算の基礎である600ℓの収入を含めて, 1500ℓである。ただし徴収ずみの租税および租税の年々の再生産に要する前払等を含まない。次の説明を参照せよ。

番上欄には、考察すべき対象が、No.1 から No.12 にわたって、列記されている。この項目のなかで、第1項目から第8項目までは支出 *depenses* をめぐる問題である。しかも次の行は、生産的支出、収入の支出、不生産的支出という風に書かれてそれぞれ左から右に三つの欄になっている。生産的支出は生産的階級の支出、収入の支出は収入＝純生産を取得する地主階級の支出、不生産的支出は、不生産的階級の支出であることは、前述の前提の説明によって直ちに理解されうるのである。

ここで、「原表」は支出を中心に表示されるということが明らかであるが、「経済表」の支出とは一体いかなるものであるのか。ミラボーが1763年に発刊した『農業哲学』*Philosophie rurale* は、ミラボーとケネーとの共著とでもいべき著書で、最初は、『経済大原表』*Grand Tableau économique* と題をつけられる筈であったこの書のとくに第7章は全章ケネー一人の筆になるものであると確証されているが、<sup>40</sup> その『農業哲学』第7章第2節の最初の方に、ケネーは次のようにいっている。

「支出は、その全部の部分が収入の最大部分もしくはその全体を自分の側に引きつけようとするさまざまな部分に分割される。経済科学はあげて、社会の活動に支出の再生と持続とを保証する自然的経路を認識することによって、支出の足どりをできる限り最大の再生産に向けることにあるのである。この単純ではあるが、微妙で、しかも不可欠の目標に到達することができるために、それゆえ、支出の性質、とりわけ、その相互間の関係を洞察することが必要なのである」<sup>41</sup> と。

「経済表の説明」は、「生産的支出は、富を永続させるために、穀物、飲料、木材、家畜、手工業の加工品の原料などの形態において、農業、牧場、森林、鉱山、漁業などに用いられる。不生産的支出は、手工業製品、住居衣服、金利、下僕、商業経費、外国の生産物などの形態でなされる」(K. and M., *Tableau*, p. i, 坂田訳『経済表』25ページ)と書いている。支出は生活のため

に、そして生産のために、いろいろな形で、つまり貨幣の形態で支出されることもあり、また実物の形態で支出されることもある。支出されることによって再生産され、価値増殖される場合もあれば、支出は消滅に連ることもある。

『経済表』は経済の循環を支出の循環という形でとらえ、富の再生産を支出の再生産として、とらえようとするのである。現代的にいえば、さまざまな経済主体が投資支出や消費支出の形で行う支出の、家計間、企業間、家計と企業とのあいだ、産業と企業、産業と産業とのあいだ、での連関を追跡するところに、経済の動脈的な運動をとらえようとするわけである。<sup>94</sup>

ところで「原表」は、生産的支出の下に、生産的階級の年前払（600リーヴルの収入を生むための年前払は600リーヴル）として600リーヴル、収入の支出の下に収入（年額）600リーヴル、不生産的支出の下に、不生産的階級の年前払（加工品のための不生産的支出の年前払）300リーヴルと書かれてある。生産的階級の600リーヴルと収入600リーヴルとが点線で結ばれ、生産的階級の600リーヴルの純生産が収入の年額600リーヴルに結ばれている。これは、前年度において、生産階級が生産した600リーヴルの純生産を、この階級は地代として、地主階級に支出つまり支払った結果、地主階級は今期の収入として、600リーヴルを所有していることを示しているのである。

地主が所有する600リーヴルは、貨幣であると考えてよい。『経済表』の前提となる世界では、借地農は地代を貨幣形態で支払うと考えてよいからである。「経済表の説明」では、「耕作者が借地農によって耕作に使用された600リーヴルの年前払をもって、前年度に生ぜしめた純生産物の売却は、地主に600リーヴルの収入の支払をあたえる」（*ibid.*, p. i, 坂田訳『経済表』25ページ）とのべてある。

今期における流通は、地主階級がその所有する600リーヴルを折半的に300リーヴルずつ、生産的階級と不生産的階級とに支出することをもって開始される。

「経済表の説明」では、「600リーヴルの収入は、地主により、半額はパン、酒、肉などにたいして「生産的支出をなす階級」に、他の半額は衣服、家具、

什器などにたいして、「不生産的支出をなす階級」に支出される。これらの支出は、それをなすものが生活資料の奢侈 *luxe de subsistance* または装飾の奢侈 *luxe de décoration* にふける程度の大小に応じ、一方または他方において多額となり、または少額となることがある。ここでは、再生産的支出が年々同額の収入を更新する中庸の状態をとった」(*ibid.*, p. i, 坂田訳『経済表』25～26ページ)とのべられる。

地主階級の支出の半分は生活資料のための農産物の購入に支出され、半分は、加工品などの購入のために支出されるのである。ここでケネーは、「生活資料の奢侈」と「装飾の奢侈」という独特の表現で地主の支出をあらわしている。「奢侈」*luxe* という言葉はここでは文字通りの意味でのぜいたくをいっているのではないが、「装飾の奢侈」は過度に支出されることによって、ぜいたくに通じ、浪費につながるとの意味を含意しているとみてよい。「装飾の過度の奢侈は、富裕な国民をきわめて迅速に、華やかさのうちに、破滅させうる」(*ibid.*, p. ii, 坂田訳『経済表』26ページ)という「説明」の言葉はそのことを語っている。

地主階級から300リーヴルを受取る生産的階級に眼を転じよう。点線は地主階級から生産的階級に向って引かれ、600リーヴルの半額がここに移るとして、300リーヴルが生産的階級の欄に書かれている。この点線は地主が農産物の購入のために生産的階級に支払った「貨幣の流れ」*financial flow* と、生産的階級が地主階級に売った「農産物の流れ」*real flow* とを同時に表現しているはずである。地主は貨幣300リーヴルを支払って、生産的階級から、生活資料としての農産物を購入したのである。生産的階級は、地主から300リーヴルの貨幣を受取って、地主に農産物300リーヴル分をわたさなければならない。この300リーヴル分の農産物はどこからくるのであろうか。この300リーヴル分の農産物の存在は、「原表」には明示されていないようにみえる。これは生産的階級の前払分からくるとみる見解もあり、ケネーが「経済表の説明」のなかで、「600リーヴルの前払は、この階級が地主階級と、不生産的支出をなす階級にた

いして行方販売によって、貨幣をもってこの階級に返還される」(K. and M., *Tableau*, p. iii, 坂田訳『経済表』26ページ) といっているのはそれを指すというのである。しかし一応は、そのような措置をとったと考えるにしても、年前払は今期における農業生産過程に投入されるべき額であって、もし地主に半分を渡してしまったならば、それだけは今期において生産され、年前払に補填されなければならないであろう。ケネーがここに引用した文章でいっていることは、今期を通じて、生産的階級の年前払にあたる600リーヴルの農産物が地主階級と不生産的階級とに販売され、貨幣の形で生産的階級の手に入る、(その600リーヴルの貨幣が純生産として地主に支払われ、次年度の地主の収入になる) ということのをのべているにすぎないのである。

もちろん、地主が300リーヴルの農産物を購入するのは、期間の当初において一括して行方わけではなく、それは全期を通じて行われ、その総計が300リーヴルになることを意味しているのであり、ただ表はそれを図式化して、当初においたわけである。<sup>四</sup> そうであれば、やはり前払は、今期を通じて600リーヴル全部が農業生産過程に投入され、全期間を通じて再生産されるとみることが自然である。

とすれば、当初の生産的階級の欄に書かれた300リーヴルは、二重の300リーヴルと考えることができないであろうか。つまり生産的階級は、今期を通じて、地主階級および不生産的階級から受取る600リーヴルの貨幣の生産過程への投資によって生産する生産額より300リーヴルだけ多く、農産物を生産することになるはずである。これが、ダブルの300リーヴルの含意である。

生産的階級が地主から300リーヴルの貨幣を受取った以後の経過について考察するに先立って、ここでもう一つ注意をしておく必要のあることは、『経済表』では、地主階級の支出のパターンを他の階級も踏襲するとされていることである。地主の支出が他の両階級にたいして折半的な構造であれば、生産的階級も不生産的階級も、これにならって自階級と他階級に折半的に支出すること



になる。しかしこのことは、それぞれの階級において支出のもつ意義とその結果とが同じであることを決して意味するものではない。ケネーがリチャード、カンティロンから、地主階級の支出パターンが他階級の支出パターンを規定するという思想を学びとったことは事実としても、ケネーは、「原表」の構想において、各階級の支出のもつ意義とその結果の相違がむしろ重要であると考えていたと思われるのである。これは前述の『農業哲学』第7章のケネーの文章にも明らかであろう。

そこで、生産的階級は地主階級から受取った300リーヴルの貨幣を、折半的に支出する。つまり半分は不生産的階級に支出して、加工品を購入するのにあてる。他の半分は、自階級内で流通することになる。しかもこのような形での300リーヴルの貨幣支出は、生産的階級の場合にあっては、地主階級の場合とは、その意義と結果を異にするのである。つまり、それは生産的投資として、300リーヴルの農産物と同時に同額の純生産を生むのである。「原表」では、300リーヴルから横に点線が引かれ、中央収入欄の300リーヴルに結ばれ、300リーヴルが純生産する……300リーヴルという風にかかれるのである。「経済表の説明」のなかでは、「地主が生産階級から購入する生産物の販売によって、先ず〈生産的支出をなす階級〉に帰属する300リーヴルは、私をしていわせれば、借地農によって、その半分はこの階級自身の消費に支出され、後の半分は衣服や什器や道具などの維持のために支出され、〈不生産的支出をなす階級〉に支払うのである。そしてこの300リーヴルは、純生産をともなって再生するのである」(ibid., p. ii, 坂田訳『経済表』26～27ページ)とのべられている。

生産的階級は、『経済表』のなかでは、先ず地主階級から300リーヴル、ついで不生産的階級から150リーヴル、75リーヴル、37リーヴル10スウ……というふうに、総計で、300を起点として $\frac{1}{2}$ の公比の無限等比級数の和、つまり $300 \times \frac{1}{1 - \frac{1}{2}} = 600$ リーヴルの貨幣を受取り、その半分を不生産的階級に支出し、

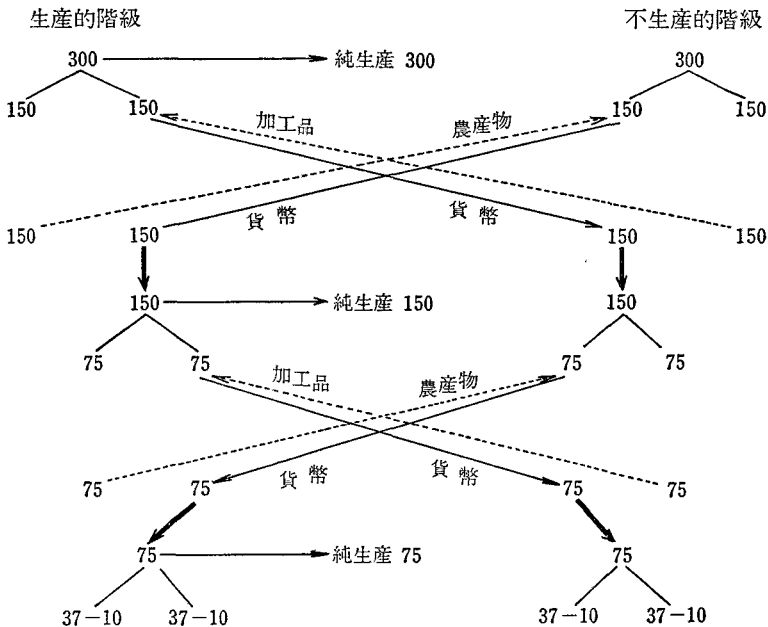
半分を自階級内で流通させつつ、600リーヴルの農産物と、それと同額の純生産とを生産するのである。つまり600リーヴルの貨幣を生産的階級に還流させることにより、600リーヴルの年前払（これは現物形態）をもって、600リーヴルの農産物と600リーヴルの純生産が生産されるのである。

不生産的階級の方は地主階級から受取った300リーヴルの貨幣の半分を生産的階級に支出して農産物を購入し、半分は自階級内流通にあて、「前払の維持と補修」にあてる。不生産的階級の場合も、最初に地主階級から300リーヴルの貨幣を受取って、それに見合う加工品等を地主に渡さなければならない。しかし、ケネーの見解では、生産的階級の場合とは異なり、この階級は価値も、純生産もあたらしく生産せず、加工によって価値を維持するのみであるから、300リーヴルの加工品は原料としての農産物なしには価値としての加工生産物（商品）を加工生産しえないはずである。この点はきわめて重要であるが、この問題については後に検討することにしてともかく、300リーヴルの貨幣が不生産的階級に地主階級から支出された時点以後の問題にすすもう。

不生産的階級は、生産的階級から150リーヴルの貨幣を受取り、それとみあう加工品を生産的階級にわたす。不生産的階級が生産的階級から受取った貨幣の半額は、生産的階級からの農産物の購入にあて、半額は自階級内に流通させる。以下、75、37リーヴル10スウ……という風に、不生産的階級の場合にも、地主階級から300リーヴル、生産的階級から300リーヴルの合計600リーヴルの貨幣を受取り、その半額を生産的階級に流通させ、半額を自階級内に流通させるということになる。

ここで生産的階級と不生産的階級とのあいだのいわゆる「支出相互間の関係」を一応図示してみると次ページのようになるであろう。

このような経過のなかで、不生産的階級は、生産的階級から購入する農産物は、「表」のうえでは、150、75、37—10、……=300リーヴル分である。受取った貨幣の半分は自階級内に流通する。ところが、当期においては、地主階級に



(以下同様)

300リーヴル分、生産的階級に300リーヴル分、合計して600リーヴル分の加工品を加工しなければならないことになる。つまり、前述した地主階級にわたす300リーヴル分の加工品の問題がここに、明確にでてくるのである。問題は、さきに生産的階級と地主階級との間の交換についてみた場合と同様、地主が加工品を購入するのは、期間の当初において一括して行うわけではない。まして、当時の慣例でいえば、加工品等の販売は注文生産と考えることもできる。不生産的階級の場合は、全期を通じて600リーヴル分の加工品が存在すれば『経済表』のシェーマは計算どおりになっているわけである。

そこで、問題は不生産的階級の前払である。不生産的階級の前払が300リーヴルあって、加工品形態をとろうと、貨幣形態をとろうとそれは価値量としては、問題の300リーヴルにあたる。

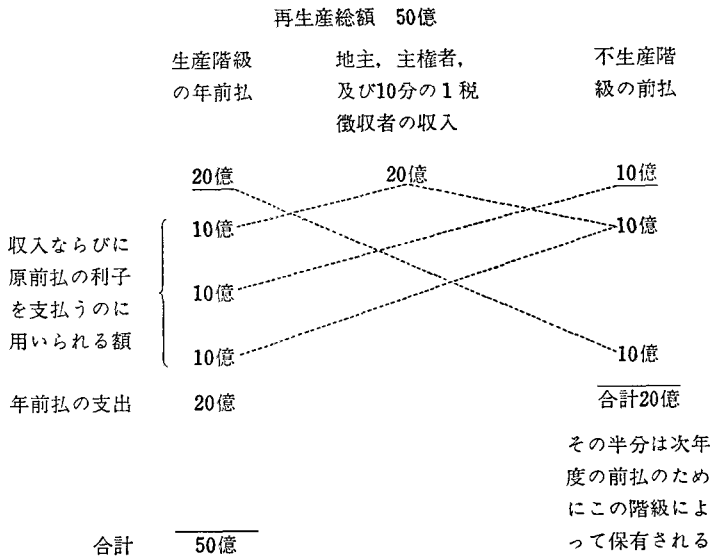
不生産的階級の前払が加工品という実物形態であると仮定すると、話はきわ

めて簡単のようにみえる。つまり、当初に、300リーヴル分の加工品が前払としてあり、それを地主に売って、300リーヴルの貨幣を地主からえればよいということになる。しかしそう仮定することは果して可能であろうか。当期におけるこの階級の前払の補填を考えてみよう。この階級が自階級内に流通させる300リーヴル分の貨幣が、そのまま自階級内で加工品に転換されると考えるならば、当期において、前払は加工品形態で補填できるだろう。しかし、ここで重要なのは、ケネーの見解では、前述のように、不生産的階級は農産物の原料なしに、加工はできないということである。不生産的階級が今期において、生産的階級から購入した300リーヴル分の農産物は、不生産階級の生活資料である。「経済表の説明」では不生産的階級は生産的階級に比べて階級人口が半分とみてよいから、生活資料は150リーヴル分でよいというふうに考えたにしても、いずれにしても、300リーヴル分の加工品の原料を購入しなければならない。こう考えれば、前払は加工品形態ではなく、貨幣形態であると考えざるをえない。つまり、不生産的階級は、当の年間を通じて総計600リーヴルの農産物を購入しなければならないのである。そのうち、いかなる割合で生活資料と原料とに配分するかは、階級内流通分を加えて考えればよく、これは、階級間流通の表示という『経済表』の見地からいえば、いわば括弧の中に入れておいてよい。

「経済表の説明」では、不生産的階級の前払については、「不生産的支出たる300リーヴルの年前払は、商業の資金および経費に、手工業の加工品の原料の購入に、ならびに職人がその加工品を完成し売却するまでの彼の生活資料とその他の必要品に用いられる」(ibid., p. i, 坂田訳『経済表』25ページ)と書かれており、それが貨幣形態であることを示唆している。

不生産的階級の年前払の300リーヴルが貨幣形態であって、それを不生産的階級は、生産的階級に支出し、加工品の原料たる農産物を購入するということになれば、この問題は解決するわけである。不生産的階級の側では、年間を通じて、600リーヴルの農産物を購入し、価値においては、それに丁度みあう加

## 経 済 表 の 範 式



工品を製造し、しかも自階級を流通する貨幣300リーヴル分を、翌年度の年払として、階級内に留保できたことになるのである。<sup>44</sup>

『経済表』の「範式」は、はっきりそういうふうになっている。前述したように、1767年にデュ・ポン編の『フィジオクラシイ』に掲載された、ケネーの「経済表の分析」のなかに書かれた、「範式」では、不生産的階級の年払10億の貨幣が、生産的階級の10億と点線で結ばれ、生産階級の農産物10億を購入して、加工品の原料になるとされているのである。

ところが、『原表』では、この階級の年払からは、階級間流通を表わす点線は引かれていないのである。

ここで、生産的階級の方にもどってみよう。「原表」で書かれている限り、前述したように、生産的階級は、600リーヴルの貨幣を受取り、その半額を不生産的階級に支出して加工品等を購入し、農産物600リーヴルを再生産、600リーヴ

ルを純生産する。再生産総額は1200リーヴル。年前払の600リーヴルは、年間のこの階級の生活資料や家畜の飼料などのために支出される農産物形態である。

生産的階級が他階級にわたす農産物は、地主に300リーヴル分、不生産階級に表の表面上では300リーヴル分であり、合計600リーヴルである。表の表面上では、貨幣300リーヴル分が自階級内流通で、その階級内にのこることになる。

しかし、不生産階級には600リーヴルの農産物をわたさなければならないし、地主には貨幣形態で純生産600リーヴルをわたさなければならないはずである。ここで前述した「<sup>ダブル</sup>二重の300リーヴル」が生きてくる。つまり生産的階級が再生産する農産物の総計は1200リーヴルに300リーヴルを加えた1500リーヴルでなければならないのである。この300リーヴル分の農産物は、不生産階級に販売されるのである。これは不生産的階級の300リーヴルの年前払の貨幣とみあうことになる。このようにして、生産的階級は、貨幣として不生産的階級から300リーヴルを受取り、これは自階級内流通の貨幣300リーヴルと合わせて、地主に純生産分として支払う600リーヴルの貨幣を構成するのである。

生産的階級の再生産する総額1500リーヴルのうち、600リーヴルは年前払の補填、600リーヴルは純生産、あとの300リーヴル分は、加工品、もしくは不生産的階級の加工労働として、生産的階級の「原前払の利子」（3000リーヴルの価値の原前払の10分の1）となるのである。「原表」第3版は、表の一番下のところに、再生産額合計として「600リーヴルの収入、その他に土地の回復する600リーヴルの年経費と300リーヴルの農業者の原前払の利子とがある。したがって再生産総額は計算の基礎たる600リーヴルの収入を含めて、1500リーヴルである。……」とのべてある。従来、「原表」の研究者が、「原前払の利子」300リーヴル分は、表中にはあらわれないで、ここにだけ注記されていたと解釈されていたのであるが、私のいわゆる「<sup>ダブル</sup>二重の300リーヴル」を考えるとすれば、「原表」はきわめて、論理的であることをあらためて確認しうるのである。「原表」は明示的には、300リーヴルだけを表現し、しかもそれと関連して、不

生産的階級の年前払からは、階級間流通を示す点線はなんにも引かれていないのである。つまり、明示的には、「表」は、600リーヴルの流通のみしか表示しないのであるが、インプリシットには、生産的階級の「原前払の利子」にみあい、不生産的階級の原料たる農産物に換えられるはずの300リーヴルを不生産的階級の年前払として、その流通を含めて900リーヴルの流通を暗示しているのである。「<sup>ズブル</sup>二重の300リーヴル」の存在、これが「原表」の理解をきわめて困難なものにしたのであった。

生産的階級の地主階級との当初の取引の300リーヴルを「<sup>ズブル</sup>二重の300リーヴル」を示すものとみて、「原表」全体の再生産＝支出構造を価値額で総括してみると次のようになるであろう。

生産的階級だけが価値を再生産して維持するのみならず、純生産し、さらに流通させる。不生産的階級は、価値を流通させると同時に維持する。生産的階級が一年間に生産資本として投資する額は、年前払600リーヴルと、原前払300リーヴル分で、これは不生産的階級とのあいだの流通を経過する。生産的階級は投資した900リーヴル総額1500リーヴルを再生産し、そのうち、600リーヴルを年前払として保有し、純生産として600リーヴルの価値を新たにつくりだす。不生産階級は生産的階級の原前払の利子にみあう300リーヴルを年前払として維持、保有する。消費してしまう額は、地主が不生産的階級に支出した300リーヴルと、不生産的階級が生活資料として消費してしまった300リーヴルの合計600リーヴルで、これは、生産的階級の新たに生産する純生産の600リーヴルとみあい、かくして、再生産の規模は同じで、単純再生産がくりかえされることになる。

ケネーの『経済表原表』をこのように分析して行くなれば、「原表」は、社会を構成する社会的諸階級の支出の構造とその社会経済的意義の相違を、諸階級間の支出の相互的連関と流通とにおいて追求しつつ、富の社会的再生産過程を完結的に表示するという目的をみごとに達成したといえることができる。しか

も、ケネーは「経済表の説明」のなかでのべたごとく、「原表」において、地主階級がその収入を生産、不生産両階級に折半的に支払う均等支出を表示し、その結果、翌年度にもまったく同じ規模で再生産がくりかえされる、いわゆる単純再生産の形を示している。しかし、「不生産的支出または生産的支出のいずれか一方が他方にまさる程度の大小により、収入の年再生産に生じる変化は、容易にこれを判断することができる」(*ibid.*, pp. i~ii, 坂田訳『経済表』25~26ページ)として、地主階級の支出構造の変化が再生産の規模を拡大したり、縮小したりすることを示し、均衡表が折半的支出→単純再生産であることを表示することによって、生産的支出増加→拡大再生産、不生産的支出の過度→縮小再生産になることを容易に表示することができることを示したのである。あるいは、ケネーは均衡体系を示す「原表」の静態的秩序を表示することを通じて、均衡の攪乱の動態的変動がどこから、どのようにして生ずるかを明らかにした、といえるであろう。

しかし、「原表」の理解は、当時の人々にとって、ケネーを師と仰ぐフィジオクラトの「エコノミスト」たちにとってすら困難であった。その表のシンメトリックでエレガントな美しさに魅いられれば、魅いられるほど、その表の内面に秘めた厳しい科学的論理の緻密で精確な構築を解きほぐすことがますます難事となったのである。

注⑭ G. Weulersse, *Le mouvement physiocratique en France de 1756 à 1770*, tome I, p. 80, note, et p. 86, note, I. N. E. D. 編の *François Quesnay et la Physiocratie* は, Chapitre VII de *Philosophie rurale* を Quesnay の著作として収録している (*ibid.*, pp. 687-728)。

(①) *Ibid.*, pp. 688-689, 坂田訳『経済表』54~55ページ。

(②) I. N. E. D. 編の *François Quesnay et la Physiocratie* は, pp. 688-689 に書かれた注のなかで、「支出の概念を通して把握された経済的統一体という、このような直観は、ケネーの天才的な独創性を物語るものであると考えてもよいであろう」と、のべている。『農業哲学』は、全巻の内容に、支出の見解をふくんでいるともいつている。



- (21) この点は、坂田訳『経済表』の解説のなかで、坂田教授によって説かれている通りである（同書45ページ）。
- (22) 『農業哲学』第7章に示された「表に示された分配の結果の概要」の表（いわゆる略表）のなかには、「生産的階級からの原料の購入に使われる不生産的階級の前払として1000リーヴル」（「略表」では基礎数字が600リーヴルではなく、2000リーヴルになっている）と書かれており、不生産的階級の前払が、生産的階級からの原料の購入に使用されることをはっきりと明示しているのである（*Philosophie rurale*, Amsterdam, 1763, Chap, VII, 坂田訳『経済表』50ページ）。渡辺輝雄教授は、「周知のように、のちの「範式」の場合と異なり、およそ原表においては、不生産階級の「前払」の回収としての貨幣額が、結局農産物の購入のために生産階級に支出されるということを表示する線型は描かれていないのであり、そしてまた、そのような取引が行われるのだという解説も、第3版の「経済表の説明」においてはもちろん、これをいっそう敷衍し発展させたミラボーの『人間の友』（*L'Ami des hommes*）の第6巻の続篇「解説付経済表」（1759年）においても見出されないのである。つまり、これらの著作においては、不生産階級の「前払」の回収という主張は、まさに、貨幣が生産階級の側へ支出されずに、不生産階級の側にとどまらざるをえない理由の一つとしてあげられていたにすぎず、それ以上に社会的再生産過程の全連関を追求するという目的をもって述べられたものではなかったのである。それ故、われわれは原表においてはこの主張をそのまま受取り、それ以上に「範式」からの類推によって、上に述べたような推測を行うことを差控えるべきことだと考える」（渡辺輝雄「再生産論と資本蓄積論の源流（1）」『東京経済学会誌』第63号〔1975年12月〕56～57ページ）とのべて、私のように考えることを拒否されておられる。渡辺教授が「原表」独自の構想のうちに潜む思想的・論理的矛盾を解決しようとするケネーの論理的発展過程を追跡して行くことによって、カンティロン→ケネー→ボードーの学説史的系譜を追求されようとする意図には敬意を覚え、「原表」の独自性を政治的・実践的目標のゆえの独自性ではなく、「原表」は「範式」と異なる理論領域をもっていることを強調しておられる渡辺教授の主張に賛同するがゆえに、かえて、私は渡辺教授のこのような拒否の主張に与しがたい。「範式」は「原表」の理解のために、その一面を解明する「表」であるとすれば、「原表」には、「範式」につつまきれないより基本的な理論領域が含まれていることは当然であろうと思われるからである。

渡辺教授自身、最近に書かれた前記論文の続篇では、「原表」の構想が、重農主義の原理的基礎と矛盾するものをもって来たことを一層強調されつつも、論文の終りの方では、『経済表』第3版や、『人間の友』の「解説付経済表」の基礎表の解説において、不生産的階級の「前払」が生産的階級の農産物と交換されるような解決を予

想しているかのようでもある、とのべられている（『東京経大会誌』第10号〔1978年2月〕33～34ページ）。

#### IV

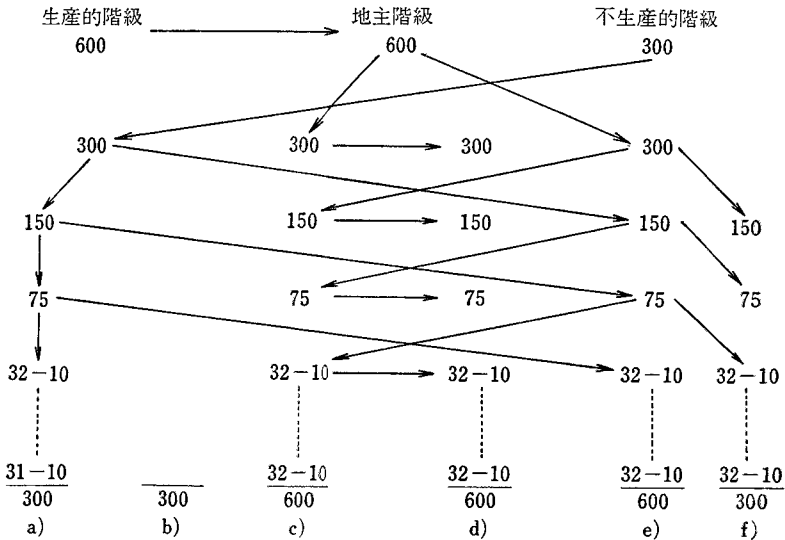
従来から、内外の『経済表』研究者たちによって、「原表」は、社会的富の再生産構造を的確に表示することに成功していない未完成な表であり、「略表」を経て、「範式」にいたってはじめて『経済表』は、その完成形態に到達することができたといわれている。「原表」が未完成であったがゆえに、ケネーは構想をあらため、「原表」のもつ実践的意図をだんだんと背後に押しやって、「略表」や「略範式」をつくり、最後に「範式」を書くことによって、社会的富の再生産過程を完結的に表示することに成功したというのが、これまでのおおよその定説であったといえるだろう。

しかしながら、もし私が本稿において分析したところが細部はともかく、その大筋において間違っていないとするならば、ケネー『経済表原表』は決して未完成形態の経済表ではないといってよい。完成されているということは、理解が容易であるということと同義ではなく、理解がきわめて困難であるということは、未完成ということと同義ではない。「原表」の含意は、明示的に表示されているもの以上のものを、精確に暗示しているのである。このような意味で、「原表」こそ『経済表』の完成形態であって、その他の表、とりわけ、「範式」は、経済表の含意をより理解し易い形で、しかもその一面をうきぼりにして分析解説したものにはかならないということができると思われる。<sup>24</sup>

注<sup>24</sup> August Oncken は、その『国民経済学史』（*Geschichte der Nationalökonomie*, Leipzig, 1922）のなかで、「原表」こそ、「経済表」の「基本表」*tableau fondamental* であって、ケネーの構想を表現するにふさわしいものであり、「範式」は、説明図としての「略表」を改良したものにすぎないという意味のことをのべているが（S. 396）、Oncken の「原表」解説はきわめて粗雑なものであるにしても、「原表」の位置づけに関するこの見解は、さすがに慧眼であったといえよう。

Henri Woog は前出の *The Tableau Economique of François Quesnay, An*

*Essay in the Explanation of its mechanism and a Critical Review of the Interpretations of Marx, Bilimovic and Oncken*, Bern, 1950 [この Woog の学位論文の Paul Paillat による抄訳 *Le mécanisme du "Tableau économique" de François Quesnay* は、I. N. E. D. 編の *François Quesnay et la Physiocratie*, Tome I, 1958 の pp.153-168 に掲載されている]において、「範式」にひきつけて、「原表」を再構成・再解釈することを試みている。同書75ページ所載の「範式」によって提供された資料による補完『経済表原表』は、示唆に富んでいる。しかし「範式」から「原表」を再構成するという Woog の方法は、「原表」のもつ「範式」ではつつききれない『経済表』の基本的理論的領域をカットすることになり、「範式」こそ完成形態であることを確認する以外のものではなくなるのである。Woog の見解にたいする詳細な検討は、あたえられた紙幅の関係で、ここでは省略する。参考までに、Woog の「補完原表」を基礎数字を直して引用しておく。



（ 但し Woog は「原表」として、『農業哲学』掲載の表をとっているため、基礎数字は 2000 リーヴルとなっているので、ここでは本稿との関連のため「原表」第 3 版の 600 リーヴルの基礎数字に直してある。 *ibid.*, p. 75 参照。）

なお、さすがに最近において、ケネー『経済表』にたいする英米の経済理論的研究も復興していることは注目に値する。論文としては、T. Barna, Quesnay's Tableau in Modern Guise, in *The Economic Journal*, September, 1975.

W. A. Eltis, François Quesnay: A Reinterpretation. 1. The Tableau Econo-

mique 2. The Theory of Economic Growth, in *Oxford Economic Papers*, July & Nov. 1975. がある。

いずれも、いわゆる近代経済学的手法で、『経済表』の理論的解明と、その経済学史上の意義、および、現代的な意義について分析したものであるが、とりわけ W. A. Eltis 論文は、基本的な点で誤りをおかしているとはいえ、きわめて緻密に『原表』ととり組み、それを分析している。私の所論と対比して考察することは、重要な課題であるが、それについては、機会をあらためることにしたい。